

つぶやき便

「パピロってなんですか?」

それが、筆者と三宅村との関係を深めることになつたきっかけだった。

東京都三宅村。人口約一七〇〇人、超高齢化社会を迎えている小さな島だ。そこには、昭和四二年から続く「築穴製菓」というパン屋がある。筆者が島を初めて訪れたとき、「パピロ」という不思議な名前のパンを知り、それを製造している「築穴製菓」と出会った。そして二〇一一年八月、その出会いをきっかけに「築穴製菓」で住み込みアルバイトすることになった。

住み込み先は、二代目である築穴一也さん・美喜子さん夫婦の家だ。アルバイトでは、ほぼ毎日パンを製造し、そして島内の商店に配達する。三宅村には大型スーパーやコンビニがないため、個人経営の商店は村民の暮らしには欠かせない。それは、村である。ある日、配達に同行しているなかで一人の高齢者と出会った。彼女は買い物のためというよりは、むしろ店主と話をすることを楽しみに訪れていた。

「ついでに帰つて」と、一人の女性が店にやつてきて、「帰るよ」と彼女に声をかけた。家族の一員だと想像できるが、彼女は名残惜しそうに会計を済ませて車に乗り込んでいった。自ら車を運転できない高齢者は、家族や他者に頼りながら商店に通り、店主と会話をして帰つて行く。それを目の当たりにしたことでの移動手段が限られている環境では、それとともになつて行動範囲が限られ、つながりにくい現象が起つている。しかし、それでも彼女たちはそのなかで積極的に外出をし、「ミニミニケーション」の機会を持つている。ここからは、強い「ミニミニケーション」欲求を感じることができる。そこで筆者は、「ミニミニケーション」・デザインの必要性を感じ、研究対象地としてせらなるフィールドワークをおこなつことにした。

筆者は、村民の誰もが利用する商店を起點としたコミュニケーションを考えることにした。三宅村は五つの集落に分かれしており、各集落に商店が点在している。それらは、個人経営のため扱っている商品は異なつていて、商品は各集落の商店で販売されており、老若男女問わず気軽に手に取られていくことに気付いた。そこで、商品のパッケージを新た

るよつた。しばらくすると、一人の女性が店にやつてきて、「帰るよ」と彼女に声をかけた。家族の一員だと想像できるが、彼女は名残惜しそうに会計を済ませて車に乗り込んでいった。自ら車を運転できない高齢者は、家族や他者に頼りながら商店に通り、店主と会話をして帰つて行く。それを目の当たりにしたことでの移動手段が限られている環境では、それとともになつて行動範囲が限られ、つながりにくい現象が起つている。しかし、それでも彼女たちはそのなかで積極的に外出をし、「ミニミニケーション」の機会を持つている。ここからは、強い「ミニミニケーション」欲求を感じることができる。そこで筆者は、「ミニミニケーション」・デザインの必要性を感じ、研究対象地としてせらなるフィールドワークをおこなつことにした。

▼「つぶやき便」発行から
手に取られるまで



なメディアとしてどういったものか、村全域を対象としたコミュニケーションのきっかけを誘発することができるのではないかと考めた。
1995年8月、村全域に配達されていくのメディアを「つぶやき便」と名付け、一ヶ月間の実験をおこなった。あす、窓穴パン屋さんがカレンダーに書き込んでもらった何十年もの記録から一ヶ月分の記録をラベルシールに印刷する。それをパンのパッケージに貼ることで、メディアとして村全域に配達され、人の手へとわたつていく。三宅村は、新聞の朝刊さえもその日の夕方にしか手元に届かない島である。その環境において「つぶやき便」は、毎朝一時には村全域で手にすることができる、新たなメディアのかたちなのだ。また、パンは毎日製造・

1995年8月、村全域に配達されていくのメディアを「つぶやき便」と名付け、一ヶ月間の実験をおこなった。あす、窓穴パン屋さんがカレンダーに書き込んでもらった何十年もの記録から一ヶ月分の記録をラベルシールに印刷する。それをパンのパッケージに貼ることで、メディアとして村全域に配達され、人の手へとわたつていく。三宅村は、新聞の朝刊さえもその日の夕方にしか手元に届かない島である。その環境において「つぶやき便」は、毎朝一時には村全域で手にすることができる、新たなメディアのかたちなのだ。

配達されたため、日々掲載内容を更新することができる。この仕組みを活かし、配達される毎日や記録の日々をリンクさせることで、何年か前のいの日は書かれた記録に触れることができる。これは、日々の細々との回想や、思い出すきっかけとなりうるだろ。本研究は、メディアを介して誘発されたコミュニケーションに着目する。「つぶやき便」を受け取った人びとを観察し、メディアをきっかけとしたコミュニケーションの存在や、其生えた想いを記述する。村民にとって「つぶやき便」がどのよのだメディアだったのかを明らかにしてみた。

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士課程

加藤文俊研究室 上地里佳 @RiiiiiiiiCa